



警告のニューズレター「角笛」

発行日：2014年6月発行（第50号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ 「エルサレムは異邦人に踏み荒らされる」 エレミヤ

◎証「艱難時代について主が語られていること（2）」E3

◎お知らせコーナー 「新刊本の紹介」

< 巻頭メッセージ >

「エルサレムは異邦人に踏み荒らされる」
by エレミヤ

本日は、エルサレムは異邦人に踏み荒らされるとして、このことがらを見ていきたいと思えます。主は、終末の日に起きる出来事を語る中で、その日、エルサレムが異邦人に踏み荒らされることを語りました。以下の通りです。

ルカ21:24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

このことを見ていきたいと思うのです。

< エルサレムという特別な町 >

異邦人や未信者にとってどうかはいざしらず、聖書を信じる神の民にとり、エルサレムとは特別な町です。何故なら、エルサレムは神に愛される町として聖書の中でたびたび記された町だからです。たとえば、以下の記述です。

詩篇:137:1 バビロンの川のほとり、そこで、私たちはすわり、シオンを思い出して泣いた。

137:2 その柳の木々に私たちは立琴を掛けた。

137:3 それは、私たちを捕え移した者たちが、ここで、私たちに歌を求め、私たちを苦しめる者たちが、興を求めて、「シオンの歌を一つ歌え。」と言ったからだ。

137:4 私たちがどうして、異国の地にあって主の歌を歌えようか。

137:5 エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたら、私の右手がその巧みさを忘れるように。

137:6 もしも、私がおまえを思い出さず、私がエルサレムを最上の喜びにもまさってたたえないなら、私の舌が上あごについてしまうように。

< エルサレムが破壊される日への預言 >

さて、上記のように神により特別に愛された町、エルサレムなのですが、しかし、聖書には、そのエルサレムが破壊される日、また、異邦人に踏み荒らされる日に関しても預言されています。以下の通りです。

エレミヤ: 6:6 まことに万軍の主はこう仰せられる。「木を切って、エルサレムに対して壘を築け。これは罰せられる町。その中には、しいたげだけがある。

6:7 井戸が水をわき出させるように、エルサレムは自分の悪をわき出させた。暴虐と暴行が、その中で聞こえる。わたしの前には、いつも病と打ち傷がある。

6:8 エルサレムよ。戒めを受けよ。さもないと、わたしの心はおまえから離れ、おまえを住む人もない荒れ果てた地とする。」

6:9 万軍の主はこう仰せられる。「ぶどうの残りを摘むように、イスラエルの残りの者をすっかり摘み取れ。ぶどうを収穫する者のように、あなたの手をもう一度、その枝に伸ばせ。」

6:10 私はだれに語りかけ、だれをさとして、聞かせようか。見よ。彼らの耳は閉じたままで、聞くこともできない。見よ。主のことばは、彼らにとって、そしりとなる。彼らはそれを喜ばない。

6:11 私の身には主の憤りが満ち、これに耐えるのに、私は疲れ果てた。「それを、道ばたにいる子どもの上にも、若い男の集まりの上にも、ぶちまけよ。夫も妻も、ともどもに、年寄りも齢の満ちた者も共に捕えられ、

6:12 彼らの家は、畑や妻もろともに、他人のものとなる。それは、わたしがこの国の住民に手を伸ばすからだ。——主の御告げ。——

6:13 なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得をむさぼり、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行なっているからだ。

この箇所には主がエルサレムを攻撃すべく敵に壘を築くことを命じていることがわかります。何故、神に愛された町エルサレムが敵に攻撃され、壘が築かれるのでしょうか？その理由もここには書かれており、「これは罰せられる町。その中には、しいたげだけがある。」と語られています。すなわち、神に愛された町エルサレムは、その背教のゆえに神の怒りをかい、それゆえ、敵に攻撃されるようになることが記されているのです。

<エルサレムが異邦人に踏み荒らされた日>

実は、エルサレムが異邦人に踏み荒らされる日とは、旧約の歴史の中で実際に実現しています。以下の通りです。

2歴36:14 そのうえ、祭司長全員と民も、異邦の民の、忌みきらうべきすべてののならわしをまねて、不信に不信を重ね、主がエルサレムで聖別された主の宮を汚した。

36:15 彼らの父祖の神、主は、彼らのもとに、使者たちを遣わし、早くからしきりに使いを遣わされた。それは、ご自分の民と、ご自分の御住まいをあわれまれたからである。

36:16 ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、主の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった。

36:17 そこで、主は、彼らのもとにカルデヤ人の王を攻め上らせた。彼は、剣で、彼らのうちの若い男たちを、その聖所の家の中で殺した。若い男も若い女も、年寄りも老衰の者も容赦しなかった。主は、すべての者を彼の手に渡された。

36:18 彼は、神の宮のすべての大小の器具、主の宮の財宝と、王とそのつかさたちの財宝、これらすべてをバビロンへ持ち去った。

36:19 彼らは神の宮を焼き、エルサレムの城壁を取りこわした。その高殿を全部火で燃やし、その中の宝としていた器具を一つ残らず破壊した。取りこわした。その高殿を全部火で燃やし、その中の宝としていた器具を一つ残らず破壊した。

この日、すなわち、ダビデ王朝の末期に、エルサレムは異邦人である、バビロン（カルデヤ）の王に席卷され、この町は異邦人に踏み荒らされました。そして、このような悲しむべきことが神に愛された町エルサレムに起きたその理由として、聖書は、「ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、主の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった。」と記します。

すなわち、エルサレムが異邦人であるカルデア人（バビロン人）により、踏み荒らされた、その理由は、神の民が、神のことばを侮り、神の預言者をばかにしたので、それで、神の怒りがこの町に対して燃え上がり、この聖なる町が異邦人に踏み荒らされるようになったのです。

ですので、これらの事実を通して「エルサレムが異邦人に踏み荒らされる」ということがらに関する聖書的な意味合いを知らなければなりません。すなわち、以下の通りです。

1. 神に特別に愛された町、エルサレムが異邦人に踏み荒らされることは決して偶然には起きず、神の意思なくしては起きない。
2. たとえエルサレムが神に愛された町であっても、その背教が、耐え難いものであり、神のみことばを侮り、神に遣わされた預言者を馬鹿にするなど、救いがたいものになった時、その時、神の怒りが燃え上がり、町は敵により、滅ぼされ、異邦人に踏み荒らされる。

このように、これらのことがらを理解できるのです。

<エルサレムがローマにより、踏み荒らされる日>

主はそのエルサレムが再度敵により、攻撃され、異邦人に踏み荒らされる日が到来することを預言しました。以下のことばの通りです。

ルカ 19:41 エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、

19:42 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。

19:43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、

19:44 そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」

この主の預言は成就し、エルサレムは西暦70年に、ローマにより、攻撃されました。その日、エルサレムは異邦人である、ローマ軍により、占領され、異邦人に踏み荒らされました。また、エルサレムに住む神の民であるユダヤ人は最後の一人まで殺されました。

何故このようなことが神の都であるエルサレムに対して許されたのでしょうか？その理由は上記バビロンによるエルサレム攻撃の時と同じように、神の民の神への反逆、背教のゆえであることが想像できるのです。事実主はエルサレムに対して以下の様に述べています。

マタイ23:37 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

23:38 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。

エルサレムは「預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。」でした。また、神により送られた神の一人子、イエス・キリストさえ十字架に付ける冒瀆の町だったのです。それで、彼らにふさわしい罰がこの町に下り、この町は異邦人に踏み荒らされ、その住民は最後の一人まで殺されたのです。神は愛である、そのことは確かに事実なのですが、しかし、神は義であり、正しく裁きを下す、このことも事実です。ですから、たとえ、旧約の神の民であっても神は正しく裁きを下し、その愛された町も不義や、背教に落ち込むなら、裁きが下される、そのことを私たちはこれらの記述から理解するのです。

＜終末の日にエルサレムが異邦人に踏み荒らされることの意味合いは？＞

さて、主は終末の日、教会時代の終わりにも、エルサレムが異邦人に踏み荒らされることを預言しました。このことの意味合いをどう理解すべきなのでしょう？そのことを聖書的に理解するには上記の理解が必須です。すなわち、教会時代の終わりに起きるエルサレムへの異邦人による蹂躪、このことも、偶然に起きることではなく、背教の神の民への神の怒りの表れなのです。

そしてこの件に関して、まず初めに知らなければならぬことは終末の日とは、教会時代の終わりであり、その日はまた、新約の神の民がその背教のゆえに裁かれる日である、という基本的なことがらです。かつての日、旧約時代の終わりに、旧約の神の民はその背教のゆえにエルサレムは、ローマにより踏みじられました。

同じく新約の終わり、教会時代の終わり、新約の神の民の背教が頂点に達したその日に、エルサレムは、異邦人に踏み荒らされるようになるのです。すなわち、旧約の終わりに旧約の神の民がその背教のゆえ、裁かれ、新約の終わりには新約の神の民がその背教のゆえに裁かれる、このことを語っているのです。そうです、聖書は非常にシンプルなことがらを語っているのです。

＜新約におけるエルサレムの意味合い＞

さて、基本的に、エルサレムとはイスラエルの国の首都の名前ですが、新約の神の民にとり、どのような意味合いがあるのでしょうか？主はかつて「このたとえが理解できないのか」として、たとえを理解することの重要性を語りました。ですので、エルサレムに関する聖書のたとえを理解しましょう。以下の記述がそのたとえの理解を助けてくれるかもしれません。

黙示録21:10 そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。

21:11 都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。

21:12 都には大きな高い城壁と十二の門があって、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあった。

21:13 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。

21:14 また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。

ここには、そのエルサレム、都の城壁には、「十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。」ことが記されています。すなわち、この箇所から新約でいうエルサレムとは単なる町の名前、都市の名前というより、十二使徒を土台とした新約の教会をさすたとえであることが理解できるのです。何故、そういえるのでしょうか？思い出して見ましょう。主はかつて、十二使徒の筆頭弟子であるペテロにこう語りました。

マタイ16:18 ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。

主はここで、明白に12使徒の筆頭弟子であるペテロに関して、彼の土台の上に、ご自分の教会を建てる事を明言されました。このことは、上記黙示録のエルサレムの土台石に書かれた12使徒の名前に通じるのです。ですので、黙示録に書かれた12使徒を土台石として建てられたエルサレムとはすなわち、新約の教会を語るたとえの表現であることがわかるのです。そして、聖書は教会時代の終わりに神の都、エルサレムが異邦人に踏み荒らされることを預言します。以下の通りです。

ルカ21:24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となつてあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

黙示録: 11:2 聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにする。

ですから、新約の光の中で理解するなら、エルサレムとは単なる1都市の名前をさすのではなく、逆にペテロを始めとした十二使徒を土台とした教会であることが理解できるのです。そして、上記「エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」とのことばは、この視点で考えるなら、非常に深刻なことがらをさす預言であることを理解しましょう。

エルサレムが異邦人により踏み荒らされること、それは、旧約においては、神の民の都が異邦人に蹂躪されることを表します。そして、新約における意味合いは？新約においては、神の教会が異邦人、すなわち、未信者により、踏みじられるようになる、そのことを預言しているのです。具体的に言うなら、終末の背教に対して、神の怒りが燃え上がり、結果、教会は神に見捨てられ、異邦人、未信者に席卷されるようになる。その結果、教会の牧師の任命、教会の教理、方針、信条、これらの教会のもっとも大事な部分が神もキリストも信じない、未信者により、制定されるその日が預言されているのです。未信者により、教会が席卷され、牧師が任命され、教理が定められるようになる、悪夢の様な日に関して、エルサレムが異邦人に踏み荒らされるとして、預言されているのです。

結果、キリストにのみ救いがある、などと信じる人が教会の牧師になることはなく、逆にイスラム教にも、仏教にも救いがある、などと語る人々が牧師になるでしょう。また、教会の教理も曲げられ、聖書から逸脱した教え、すなわち同性愛も、不倫もOKというような教えがまかりとおるようになるのでしょう。このことは荒唐無稽な想像ではなく、その日すなわち、教会が背教に陥り、罪が教会に蔓延する日は以下の様にテサロニケの手紙に預言されています。

2テサロニケ: 2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法(罪)の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。

ここに、教会に背教が起きること、結果、不法(罪)の人が現れ、教会に罪が蔓延することが預言されています。このことは、教会が異邦人、未信者に踏み荒らされるという記述と符合します。さらに、以下の黙示録の記述は、その異邦人、未信者が教会を席卷する日をたとえて語ったものです。

黙示録: 13:11 また、私は見た。もう一匹の獣が地から上って来た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。

13:12 この獣は、最初の獣が持っているすべての権威をその獣の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。

13:13 また、人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行なった。

13:14 また、あの獣の前で行なうことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。

13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。

この様に聖書のあらゆる記述は、教会時代の終わり、すなわち、教会の背教が満ちる日に教会が異邦人、すなわち、未信者に踏み荒らされる日が来ることを語ります。その日に備え、正しく終末の日に対して必要な備えを行いましょ。一以上一



エルサレムの崩壊

去年の三月も、イエスさまが艱難時代について、こんなことを語っているかなあ、と思うことを証させていただきました。その時はヨブ記を通して、「感情思索に勝利して、永遠の命を得ていきましょう！」なんていう風に話をさせていただいたかと思います。その続き、というほどのことではありませんが、今回は、最近弟子訓練の集会の中で教えていただいた事柄について話したいと思います。どんな話か？と言うと、艱難時代にクリスチャンがどのように扱われ、逮捕されたり、尋問されたり、投獄されたり、はたまた死に至らせられてしまうのか？ということです。それに関して、みことばを少し見てみましょう。

参照 マタイの福音書 27:37

27:37 また、イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである。」と書いた罪状書きを掲げた。

参照 ルカの福音書 22:37

あなたがたに言いますが、『彼は罪人たちの中に数えられた。』と書いてあるこのことが、わたしに必ず実現するのです。わたしにかかわることは実現します。」

イザヤ書 53:12 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。

上記マタイの福音書に「罪状書き」とあります。しかも「イエスの頭の上」に掲げられたとありますように、イエスさまは「罪人」として扱われて、十字架の上で命を失ったことが分かります。このことは大事なポイントなので、繰り返して言います。神さまの御子であるイエスさまが、しかも一度も罪を犯されなかったイエスさまが、なんと！「罪人」呼ばわりをされて亡くなったのです。

ルカの福音書のみことばは、イエスさまが弟子たちに、これからご自分の身に起きることを言われたことです。「『彼(イエスさま)は、罪人たちの中に数えられた』と書いてあるこのことが、わたしに必ず実現(KJV訳:成就)する」、ということを言われています。「『彼(イエスさま)は、罪人たちの中に数えられた』と書いてあるこのこと」と、ありますように、このことは前もって預言されていたのです。それがイザヤ書のみことばです。下線を引いた部分「そむいた人たちとともに数えられた」が、まさしくそのことを語っています。ちなみに、「そむいた人たち」のところは、KJV訳だと“transgressors”とあって、これはルカの福音書に書かれている「罪人」と全く同じことばです。そしてマタイの福音書に書かれているように、たしかにこのこと、つまりイエスさまが「罪人」として数えられることは実現しました。

さて、旧約時代のことを少し振り返ってみましょう。皆さまもご存知のように、イエスさまが初降臨されて、30歳になってから宣教活動を開始されました。いわば3年半の公生涯と言われる期間です。その3年半の期間とは、どんな時だったのか？と言うと、旧約時代の終わり(末)の時です。この時代は、パリサイ人や律法学者や祭司長をはじめとする、神さまを信じる多くの神の民がどうしようもなく墮落していた時です。「悪」を「善」と呼び、「善」を「悪」と呼んでいた時代です。それゆえに、全てにおいて正しかったイエスさまが十字架に処せられてしまったのです。ですからこの期間は、旧約時代の末の艱難時代の時とも言えるのです。

そう、そしてかねてから何度も語っていることですが、私たちが生きている新約時代の終わりにも、イエスさまの初降臨の時に起きたことが再現するということが預言されています。「何を根拠に？」と言われる方もいらっしゃると思いますので、ほんの一部を紹介したいと思います。

マタイの福音書24章にそのことに関する記述があります。24章のはじめのほうで弟子たちが、イエスさまの再臨前や世の終わりに起きることについて質問しています。その中で、**「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないようなひどい苦難がある」**とイエスさまは言いました。これはまさに、世の終わりに起きる「3年半の艱難時代」のことです。ですからクリスチャンは艱難を通らずにその前に携挙される、なんていう教理は間違えた教えだということがお分かりになるかと思います。

そして、その3年半の艱難時代に何が起きるのか？それがどんな風に起きてくるのか？が、本日の話のメインですが、はじめに話をしましたように、また、聖書に**「人々はあなたがたを議会に引き渡す」「兄弟は兄弟を死に渡し」**なんていう記述もありますように、艱難時代は正しいクリスチャンが引き渡されたり、逮捕されたり、投獄されたり、はたまた死罪に定められる時だということが分かります。そして、何を根拠にそんな風になるのか？ということが、本日参照したみことばにヒントや答えがあると思います。それは、イエスさまが「罪人」として扱われたことです。絶対にこうなる！と断定はできませんが、かつての旧約時代の艱難時代にイエスさまのことを救い主と認めずに、反対にカルト扱いをしたように、新約時代の艱難時代も、恐らく同じような流れになっていくのではないかと思います。つまりみことばに正しくつくクリスチャンのことを、「カルト」とか「異端者」と呼ぶのではないかと思います。

今のところ、特に日本ではそんな風潮はほとんど無いかもしれませんが、艱難時代に入ると、「イエス・キリストはじつは偽物だった」とか「イエス・キリスト以外にも救いはある」というようなムーブメントが起きてきて、それに同調しない人は法律を犯す者として逮捕される、はたまた死刑に処する、なんていう法律が制定されるのではなからうか？と思われます。つまり、イエ

ス・キリストのみに救いがあるとか、イエスにこそ真理がある、なんて公言する人は、イエスさまがそうであったように、「罪人」「犯罪人」扱いされるのでは？と思います。今はまだ特別な動きが無いので断言はできません。概ねそうなっていくのではないだろうか？と言えるくらいです。

そしてアメリカではもうすでに、みことばに堅くつくクリスチャンが迫害されたり、逮捕されたり、投獄されたりしているそうです。たとえば路傍伝道をしていた牧師が逮捕されたり、同性愛のことを指摘したクリスチャンたちが投獄されたりしているそうです。しかも罰金まで科せられている、なんてことまで聞きました。そしてこれらのことは、すべて法律の下で行われているそうです。このようなことを聞いて、日本にいるから大丈夫！なんていう風に申し上げたいところなのですが、**「全世界に来ようとしている試練の時」**ということがヨハネの黙示録に書かれていますので早かれ遅かれ、こういう時が日本にも来るでしょうし、やがては全世界に及んでいくと思われます。

ですから私たちはその日のために今から備えをしたほうが良いと思います。と言うのは、もし、みことばに従って正しく歩むなら、そして、たとえ法律が変えられたとしても、今のようにイエスの御名を告白し、イエスにのみ救いがあるという信仰の歩みにこれからも徹していくのであれば、脅すわけではありませんが、しかし概ねイエスさまと同じような経験をするのではないかと思います。

実際に当時のペテロやヨハネやパウロも投獄されたり、逮捕されたりしましたし、彼らの中で殉教した人もいました。それこそ第二テモテの手紙に書かれていることですが、パウロは世を去る前に、**「私は今や注ぎの供え物となりま**す。**私が世を去る時はすでに来ました」**なんていうことを言っていました。ちなみに「注ぎの供え物」とは、「殉教」のたとえです。なので、こう

いうことも一応想定内と考えておいたほうが良いのでは？と思います。そういった心構えでいるならいざそういう時が来ても、慌てふためくこともなく、落ち着いて対応できると思います。

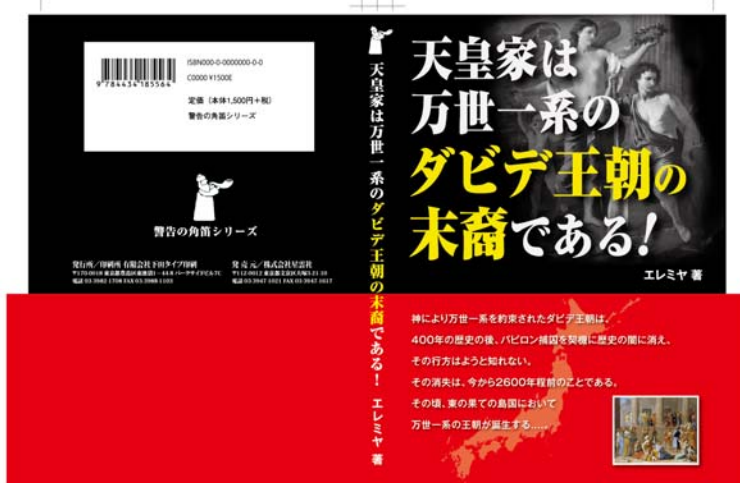
もちろん艱難時代に入ったからといって、イエスキリストの守りや助けが無くなるわけではありません。ヨハネの黙示録には、「**あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。**」ということが書かれていますので、試練や艱難の中でも正しくみことばを守るクリスチャンには、イエスキリストの守りや助けも与えられると思いますので、それほど心配しなくても大丈夫だと思います。それでもあわや、逮捕や投獄や殉教が許されたとしても、しかし、きちんとみことばを守るクリスチャンは、最後までイエスキリストに守っていただけるのです。要するに「天の御国」に入れてもらえるのです。反

対に正しいクリスチャンを迫害したり、議会に引き渡したり、訴えたり、死罪に定めたりする人は、御国を相続できない可能性がありますので、気を付けていきたいと思います。

「まだまだ先のことから」「自分には関係が無い」と思われる方はともかく、しかし、私個人としては、「もしかしたら通るかもしれない」ということも視野に入れて歩みをしたほうが安全だと思います。それこそ「備えあれば憂いなし」なんていう諺もありますので、「そうかも知れないなあ」なんて思われまして、ぜひ備えていきましょう！そして最後の最後までイエスキリストのことばを守って、永遠の命を獲得していきましょう！

今回も大事なポイントについて語ってくださった神さまに、栄光と誉れがありますように！
—以上—

<お知らせコーナー>



エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax: 020-4623-5255, メール truth216@nifty.com